



写真-1 神河橋から下流を撮影（平成24年7月）

### ■ 鮎の友釣り発祥の地～揖保川

上の写真-1は、宍粟（しろう）市山崎町の揖保川に架かる神河橋から下流を撮影したものです。三津（みつ）井堰の上流右岸にある岩が「縁（えん）の岩」といって、五十波（いかは）に住む下駄屋の甚平さんが鮎の縄張り習性に気づき、「鮎の友釣り」を思いついた場所と言われています。すぐそばを走る国道29号沿いには「鮎友釣り発祥の地 縁の岩」と刻まれた石柱が建てられています（写真-2）。

揖保川は、毎年、鮎漁が解禁となる5月下旬頃になると多くの太公望が待ちわびたようにやってきて10mもある釣竿で友釣りを楽しんでいます。今年も昨年同様5月26日に解禁、漁期は10月31日までの5ヶ月余りです。

揖保川での鮎釣りは、「友釣り」に限定されていて、罟（おとり）に生き鮎以外（ルアー・疑似鮎等）を用いることは禁止されています。友釣りは、鮎の縄張り習性を利用して、鼻環（はなかん）を付けた罟の鮎を追い払おうと体当たりしてくる鮎を、罟につけた針で引っ掛けて釣り上げる方法です。このような習性は、進化の過程で厳しい環境の中を生き延びて子孫を残すために身に付けたと言われていて、成長に必要な量の藻を確保する面積一約1m四方の範囲一を縄張り（摂食縄張り）として防衛する性質をいいます。



写真-2 「鮎友釣り発祥の地 縁の岩」石柱

### ■ 大きくて味もよい揖保川の鮎

揖保川は大きな鮎が釣れることでも知られていて、8月下旬から9月中旬にかけて成長した“尺鮎”を狙う釣り人も多く、平成10（1998）年9月には35.3cmという1尺を超える大物が釣れたとか。また、揖保川の鮎は、大きさもさることながら味もよく、日本一うまい鮎が育つ川を選ぶ「清流めぐり利き鮎会」（高知県友釣り連盟主催）において、過

去グランプリを2度（平成19、22年）、準グランプリを2度（平成18、23年）獲得しています。この会は、全国の川から鮎を集め、鮎の姿・香り・味を評価するものですが、会の主催者の話によると、鮎が河床の石に付着する藻類を食べて成長するため、河川環境が鮎の味に現れ、良い川の鮎は香り高く身も締まっているそうです。揖保川の鉄分の少ない軟水が“うまい鮎”を育てているとも言われていて、揖保川の水は醤油や手延素麺のみならず、鮎の味にも好影響を与えているようです。

### ■ 「下駄屋甚平」さんの逸話

「道の駅山崎」（平成25年3月31日閉駅・登録抹消）の裏手にある揖保川高水敷の駐車場の片隅に「アユの友釣り発祥の地」の看板（写真-3）が建てられています。「鮎の友釣り発祥の地」は諸説あって、伊豆の狩野川や京都の八瀬川（現・高野川）、茨城という説もあるそうです。

## アユの友釣り 発祥の地

これより約3.5km上流、山崎町五十波の地にある「エンノ岩」と呼ばれている揖保川に突き出た岩は、古文書にも記されている伝説のアユの友釣り発祥の地である。

伝説によると…

昔、五十波に「下駄屋甚平」という天下第一品の腕前を持つ下駄職人が住んでいた。

甚平さんは、ある夏の日、揖保川の清流を覗き見ると、二匹のアユが激しい縄張り争いをしていた。

このアユの闘争行動に興味を持った甚平さんは、「アユそっくりな形をした物を作り、その尻の方に針を付け、小石を錘にして流れの中に入れて釣れるかも…」と考えた。下駄づくりに使っている木を材料に、日頃の腕を振るって見事な擬似アユを作り上げた。


さっそく自宅近くの「エンノ岩」へ行き、流れの中に入れた。しばらくすると、アユが縄張りを守ろうと擬似アユめがけて猛烈な攻撃。思い通り尻の方に付けた針にかかり見事に釣り上げることが出来、甚平さんは大喜び。しかし、終日がかかりでたった三匹しか釣れなかった。

そこで「擬似アユでなく、元気な生きアユを“おとり”にすればどうだろう…」と思いつき、これを実行したところ面白くてたまらんほどアユが釣れた。

それから下駄づくりの仕事をほったらかしてアユ掛けに明け暮れたそう。

これがアユの縄張り習性から考えだされた、今で言う「アユの友釣り」の始まりである。

この友釣りのことが、山崎町にやってきた商人によって全国各地に伝えられたという。



清流を大切に！  
し そう 観光協会  
揖保川漁業協同組合

写真-3 「アユの友釣り 発祥の地」の看板



写真-4 旭橋下流での鮎の友釣り風景（平成24年7月）



写真-5 穴栗市五十波での鮎の友釣り（平成24年7月）

### ■ 鮎の一生

#### 【仔魚、海へ下る】

河床礫に産みつけられた卵は直径1mm程度で、水温が15～20℃であれば2週間前後で孵化します。孵化した仔魚<sup>※1</sup>（しぎょ）は全長5～7mmで、卵黄嚢と呼ばれる栄養分の入った袋を腹部に持っていて、この栄養分を摂餌開始までの間のエネルギー源としています。仔魚は、卵黄を消費しながら川の流に乗って海に下るが、概ね5日以内に餌となるプランクトンが豊富な汽水域に到達しなければ、卵黄を消費し尽くして餓死してしまいます。

海に下った仔魚は成長して稚魚になり体長は50mm～80mmになる。鮎の仔稚魚（しぎょ）は砂浜の波打ち際に生息している。稚魚<sup>※1</sup>（ちぎょ）の成長を支える環境づくりとして、川の環境改善だけでなく海や河口付近における干潟や砂浜なども必要。

【稚魚の遡上】川と海の水温が同じになる頃から遡上が始まる。揖保川では3月から6月。

【成長】遡上する鮎は体長 50mm までは動物性プランクトン、60～70mm までは動物性と植物性のエサを食べ、成魚になってからは石に付着している藻類を食べる。遡上中は群れをつくるが、中流域に達する頃には群れを離れ「縄張り」を持つようになる。5月頃から本格的に成長のスピードが増し、2～3ヶ月で20cm以上になる。石に付着する藻類の繁殖が盛んになる夏場は、俗に「一日一分(3.3mm)」成長すると言う。

【産卵の準備】8月下旬頃から淵に集まりはじめ、降雨による増水とともに下流の産卵場所に向かう。産卵時期のアユは「さびアユ」と呼ばれ雌雄共に体の表面が黒ずむ。

【産卵】水温が15℃～18℃の時に産卵の最盛期となり、揖保川では11月から12月の中頃までが産卵のピークと考えられている。産卵数は個体差があるがおよそ2万～7万粒である。産卵場は、中・下流域の河床勾配が緩やかになった砂礫、あるいは小砂利河床の浅瀬や平瀬で、揖保川では王子橋から国道250号網干大橋の間とされている。親魚(しんぎょ)は産卵が終わると死んでしまう。

※1 仔魚・稚魚：いずれも魚類の成長過程における初期の発育段階の一つ。仔魚は幼生とも呼ばれ、卵から孵化した後、骨格や鱗(ひれ)などの基本的な体制を整えた稚魚となるまでの段階をいう。多くの場合、生まれたばかりの仔魚は全長数mm程度で、鱗や臓器の発達は未熟で遊泳力もほとんどない。また、厳しい条件の下で外敵からの捕食を避け、適切な成育環境へと移動しなければならない。このため、仔魚の生存率は極めて低く、稚魚期に到達できる個体はごくわずかである。稚魚は、仔魚の次のステージで、鱗条数や脊椎骨数が定数に達し、ほぼその種の特徴を示すまでの成長段階で、体の斑紋や色彩などはなお成魚と異なる。稚魚期の次のステージは未成魚期または幼魚期と呼ばれる。なお、しばしば仔魚と稚魚、両者を合わせて仔稚魚と総称することもある。

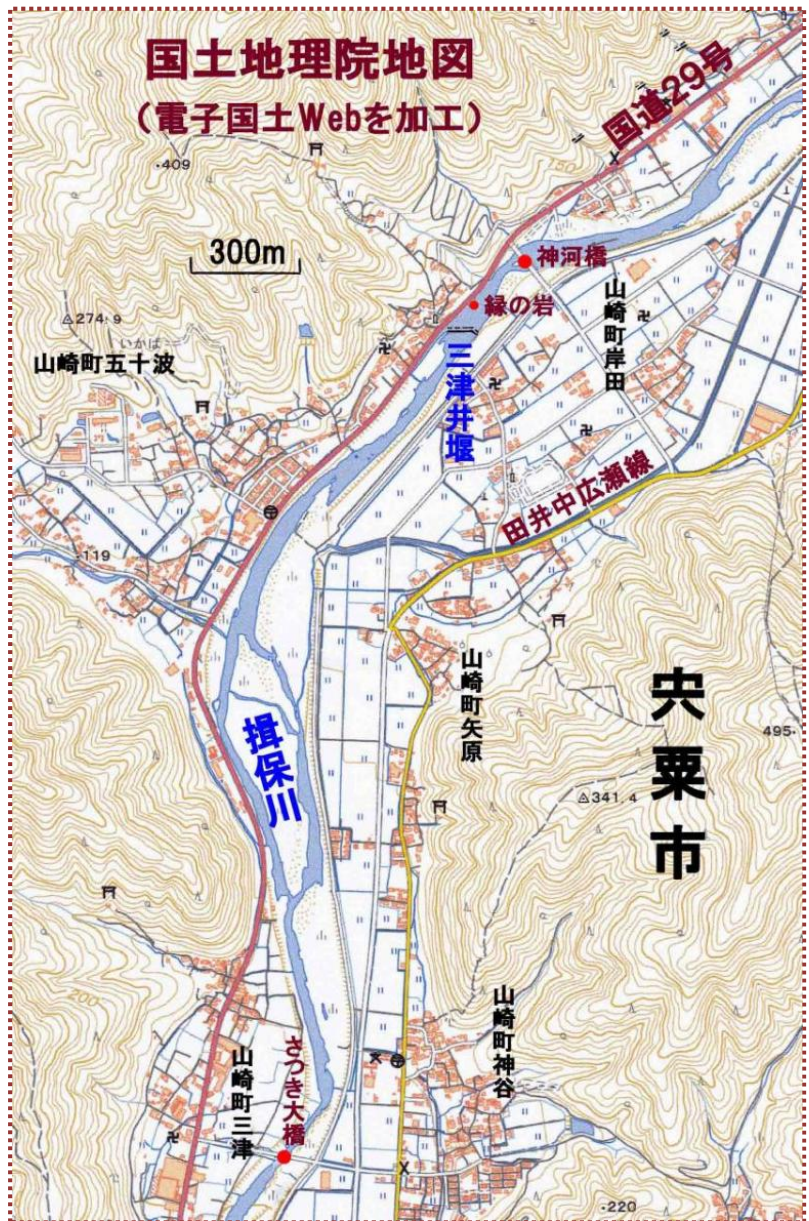


図-1 「縁の岩」周辺の揖保川の地図

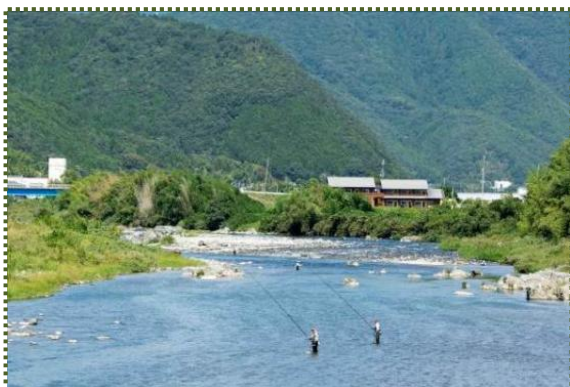


写真-6 穴粟市役所付近「十二ノ波」の下流での鮎釣り



写真-7 王子橋下流の揖保川(前方にかすかに見えるのが王子橋)

■ 下水道整備により水質が大幅に改善、かつての清流が復活

昭和 30 (1955) 年頃までの揖保川は、天然鮎の遡上も多く、中流域での鮎魚が盛んでした。

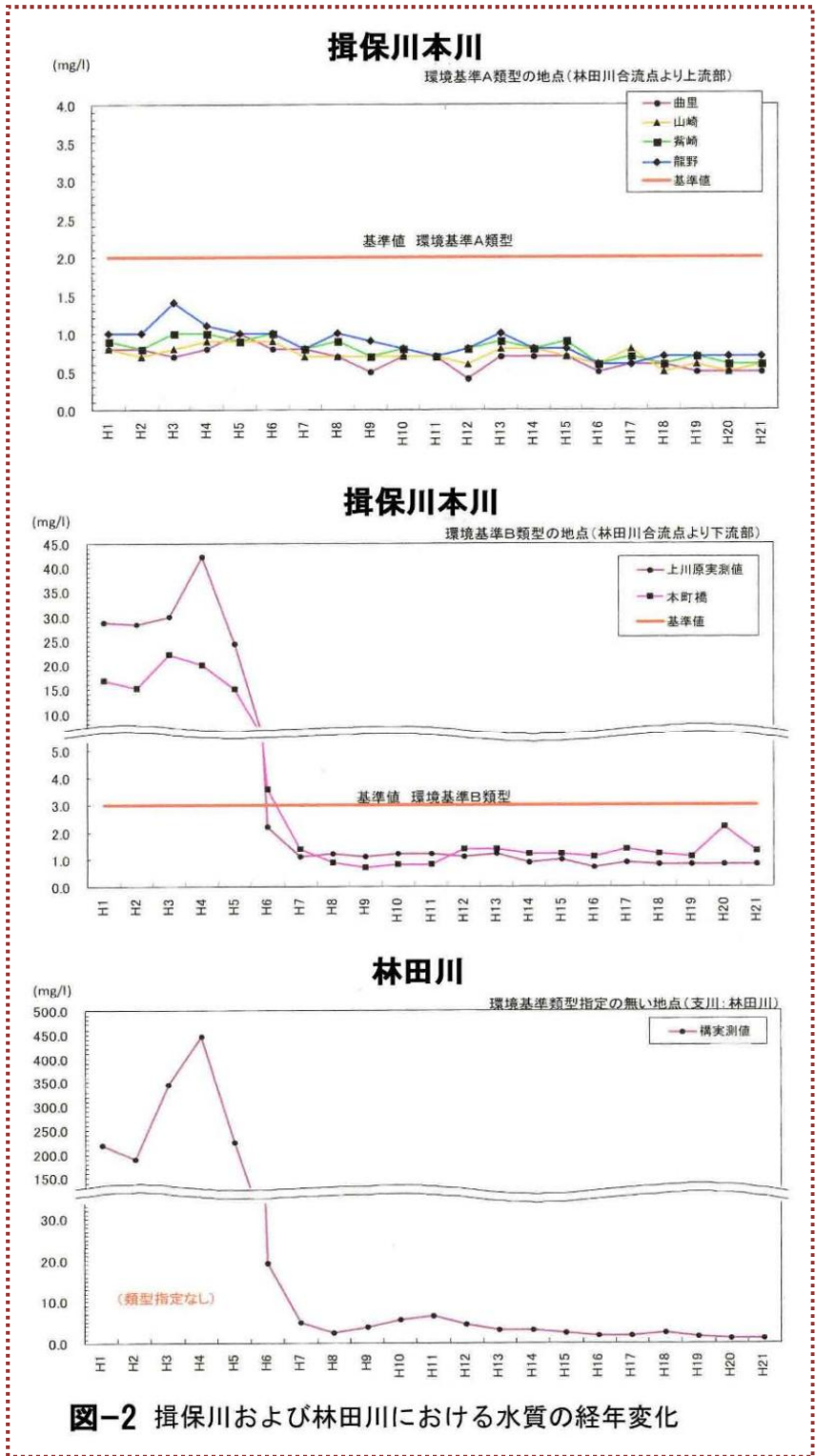
しかし、昭和 30 年代以降、工業の発展に伴って工場からの排水や生活排水が下流の河床にヘドロを堆積させ、魚や昆虫等の生物が生息できない環境となりました。特に、揖保川の左支川・林田川沿川から流入する皮革排水の影響で、揖保川の下流部は水質が悪化、揖保川環境基準点の上川原地点水質調査において、平成 5 (1993) 年まで 19 年間連続全国ワースト 5 位に挙がっていました。

姫路市網干区に建設された揖保川流域下水道の揖保川浄化センターが昭和 63 (1988) 年 6 月に下水終末処理の運転を開始し、平成 6 (1994) 年 4 月には、処理能力が 1 日 100,000m<sup>3</sup> となります。そして、同年 6 月に皮革排水全量が揖保川流域下水道に接続された結果、水質は図-2 のように劇的に改善され、近畿地区ベスト 2 位にまで上がりました。

そして、平成 7 (1995) 年には天然鮎の遡上が約 40 数年ぶりに住民により確認されました。

■ 天然鮎を増やす

そもそも「天然鮎」とは、どのような鮎なのか。明確な定義はないようですが、本来的には、「自然産卵で生まれ、孵化した仔魚が海まで降下し、稚魚になって再び川を遡上、成長して産卵する鮎」が天然鮎でしょう。その天然鮎を増やすために、さまざまな対策が採られています。



① 稚魚の放流

従来から取り組まれてきた対策です。揖保川漁協では、たつの市新宮町北村の揖保川左岸に鮎種苗生産施設「揖保川鮎種苗センター」を整備して、冷水病に強い放流種苗(種苗とは稚魚のこと)を自家生産しています。平成 24 (2012) 年には、生産した稚魚約 180 万匹を 4 月頃から 3 回に分けて放流しています。

② 産卵場の造成

揖保川は、他の河川と同様農業用水や生活用水等の取水により河川流量が減少し、そのために、鮎の産卵場の河床がアーマーコート<sup>※</sup>化して産卵に不適な環境が形成されていると見られています。



写真-8 揖保川鮎種苗センター

鮎の産卵に不可欠な小砂利の「浮き石」河床が消失しているのです。「浮き石」河床というのは、礫間に隙間がたくさんある状態で、礫の表面に鮎が産卵すると隙間を通して礫の下の方まで卵が入って行きます。ところが、河床表面がアーマーコート※2 化していたり、礫の隙間が砂や泥で目詰まりすると、産卵しても卵は河床表面付近に留まり、別の鮎、あるいはウグイやヨシノボリなどに卵が食べられてしまいます。産卵環境が悪化してくると、産卵に適した場所が狭くなるために、別の親が産んだ産卵床に重ねて産む、いわゆる「重ね産み」が観察されるようになります。「重ね産み」の場合、卵が礫から剥離して流されてしまうことが起きるとか。

このような産卵環境を改善するために産卵場の造成を行います。揖保川漁協では、毎年 10 月に王子橋下流の産卵場において、備中鍬(くわ)で河床を耕したり、砂利を運んだりして産卵場の造成を行っているそうです。

### ③ 十分な数の親魚の確保

いくら良好な産卵場があっても、親魚がいないと産卵はできません。産卵に必要な親魚数(川の収容力から必要な親魚数を算定)を確保するために、毎年 10 月下旬から 11 月にかけて親魚を産卵場へ放流するとともに、産卵場保護区(王子橋から国道 250 号網干大橋の区間)を設定しています。

※2 アーマーコート(armor coat): armor は甲冑、coat は皮、膜、層と言う意味。河床を構成する材料のうち細粒部分が流水によって運び去られた結果、粗い礫のみからなる層によって河床が覆われ自然の平衡状態が出現する。これをアーマーリングといい、粗い礫からなる河床面をアーマーコートという。流量の減少、土砂供給の減少などにより今まで程良く供給されてきた土砂がうまく供給されなくなって、河床に堆積していた細粒分(砂・シルトなど)が洗い流され、粗粒分(礫)のみが残ってしまう現象で、この現象が発生し始めると、複雑で多様な底質環境が単調な構造となり、特定の生物種が優勢になってしまう。これにより生態系のバランスが崩れ始め、河川の生物環境を変えてしまうことになる。

### ■ 神河橋の高欄に鮎

写真-1 は、宍粟市道河東神野線の神河橋(橋長 159.94m)から撮影したのですが、その神河橋の高欄には、写真-9 のように鮎がデザインされています。

なお、現在の神河橋は平成 2 (1990) 年 9 月 18 日の台風 19 号による洪水で旧橋が流



写真-9 神河橋の高欄



写真-10 平成 2 年 9 月洪水による流失前の旧神河橋(「揖保川水系河川整備計画」から引用)

失したため架け替えられたもので、旧橋は現在の位置より約 250m 下流にある三津井堰の直下に架かっていました。

### ■ モノローグ

「旧下水道法」(明治 33 年制定) 施行 100 年の記念事業として、平成 12 (2000) 年に国土交通省が全国で水環境の保全回復に成功した河川・湖沼などを「甞る水百選」として表彰しています。兵庫県では、庄下川・八家川とともに揖保川が表彰されました。振り返ると、筆者も昭和 58 (1983) 年から 3 年間、龍野土木事務所に勤務していて、林田川に流入する皮革排水、河床に堆積したヘドロなど、どうしようもない状況を見てきただけに、現在のきれいな水の流れを信じられない思いで見えています。まさに下水道の事業効果です。

ところで、今回のテーマが「鮎」なのに鮎の写真が 1 枚もないことに気づき、5 月末の解禁直後に鮎の写真を撮ろうと揖保川に行きました。新香橋(たつの市新宮町)の下流で友釣りをしているおじさんに「釣れますか。」と聴くと、「あかん。さっぱりや。天然もので 6~7cm、小さいわ。期待して来たんやけどなあ。」とのこと。

というわけで、鮎の代わりに JR 姫新線の播磨新宮駅から東へ徒歩 5 分の所にある嘉永 3 (1850) 年創業の老舗「櫻屋」の最中『揖保乃鮎』の写真に掲載します。体長 13.5cm、甘さもしつこくなく、下戸で甘党の筆者にとっては、鮎の塩焼きもいけれど……。



写真-11 「揖保乃鮎」

それにしても、今年の阪神はダメですね。“落ち鮎”よりも早く降下を始めています。せめて、オールスターまでは何とかAクラスにしがみついていたほしかったのに……。⇒結果、セリーグ2位で、クライマックス・シリーズを勝ち抜いて日本シリーズに出してしまいました。日本シリーズは1勝4敗でSBに敗れました。日本一の楽しみは来年以降にとっておきましょう。



写真-12 三津井堰下流での鮎釣り風景

#### 【参考資料】

- 1 『揖保川水系河川整備計画』 近畿地方整備局 平成 25 年 7 月
- 2 『揖保川の水質の現況』 水質汚濁防止協議会 HP
- 3 『日本の淡水魚』 (株)山と溪谷社 平成 5 年 9 月
- 4 『友釣の起源とその技法』 友釣の話 HP 平成 15 年 1 月  
<https://www5e.biglobe.ne.jp/~tomozuri/tomozuri.html>
- 5 『揖保川水系河川整備計画(国管理区間)』 国土交通省近畿地方整備局 平成 25 年 7 月
- 6 『広報いぼがわ：第 6 号』 揖保川漁業協同組合 平成 23 年度
- 7 『広報いぼがわ：第 7 号』 揖保川漁業協同組合 平成 24 年度
- 8 『揖保川』 揖保川漁業協同組合 HP <https://www.ayuibogawa.com/>
- 9 『アユ、稚魚、仔魚、清流めぐり利き鮎会』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 26 (2014) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.38

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.38